

ドイモイ (Doi Moi) 下のベトナムにおける「戦争の記憶」

今井昭夫

はじめに 東南アジアにおける「戦争の記憶」とナショナリズム

東南アジアにおける「戦争の記憶」について考える場合、われわれ日本人がまず考えておかねばならないのは、第二次世界大戦期における日本の軍事支配の記憶の問題にしたいと思います。東南アジア史研究者ダイアナ・ウォン (Dina Wong) の論文「戦争の記憶と歴史の物語 (War, Memory and the Significant Past)」¹ は、シンガポールにおける、その問題を扱っています。この論文によれば、一九九〇年代に入ってグローバル化が進んで行く中で、シンガポールの中には新しい国家観にもとづく建国神話を創造する必要性が生じてきた。そこで国家が「戦争の記憶」、とりわけ第二次世界大戦期の日本の軍事支配下での苦しみや困難を分かち合った集団的記憶を活用するに至った、とされています。

「建国説話」(あるいは「ナショナル・ヒストリー」と日本の軍事支配期の「戦争の記憶」が強く結びつけられている点では、ベトナムも共通します。ベトナムにおいては日本の軍事支配体制下の一九四五年起きた

「二〇〇万人」餓死の問題があります。これは一九四五年八月革命直前の苛酷な日本の軍事支配のありさまを浮かびあがらせるために、革命後も再三取り上げられている記憶で、ベトナムの革命政権にとって、一種の「建国神話」のような働きをしてきたとも言えます²。このように、日本の軍事支配の「戦争の記憶」は、シンガポールやベトナムにおいては、「建国説話」と結びついており、さまざまなたちでその記憶を喚起することは(例えば、そこにおける日本の戦争責任を究明するということも含めて)、意図するとしなにかかわらず、当該国の「ナショナル・ヒストリー (National History)」構築に加担することになっていくことになります。ですから、日本人として日本の戦争責任について自覚的であらねばならないのは当然ですが、またアジアを研究対象とする地域研究者としては、研究対象とする地域・国家における、「戦争の記憶」を利用・動員した「ナショナル・ヒストリー」構築の動きについても自覚的になっておく必要があるのではないのでしょうか。日本の軍事支配の実態を究明していくことは前者の自覚につながり、「戦争の記憶」を問題にすることは後者の自覚に

関係してくるのだと思います。

後者の点については、民族解放戦争の「戦争の記憶」についても同じことがいえます。多くの東南アジアの国々にとって、「戦争の記憶」といった場合に、第二次大戦以上に思い起こされるのは民族解放、独立闘争の戦争になるでしょう。東南アジアにおける「戦争の記憶」を考えることは、この民族解放戦争の記憶について考えることが主になるのではないでしょう。日本軍事支配期の「戦争の記憶」が当該国にとって、いわば負の側面であるのに対し、この「戦争の記憶」は独立国家の政治的正統性の主たる源泉となってきました。東南アジアの殆どの国々は一九五〇年代までに独立を獲得し、一九六〇年代になると開発独裁体制が樹立されるようになり、その政治的正統性の源泉を、民族独立から経済発展に比重を移してきました。しかしベトナムにおいては、民族解放戦争が一九七五年まで続き、改革開放路線が採択されたのは一九八〇年代のなかばになります。他の東南アジアの国々と比べると、ベトナムにおいては、民族解放戦争の記憶がまだ生々しいといえます。さらに一九九〇年代に入ると世界的にグローバリ化が進展し、インドネシアなどに見られるように、従来の開発独裁体制とは異なる政治体制が模索されるようになり、ナショナリズムの再編が進行中だとも考えられます。ダイアナ・ウォンはシンガポールを例に挙げて、一九九〇年代のグローバリ化の進展する中で、新しい建国神話を創造するものとして「戦争の記憶」が活用されていることを指摘しているわけですが、民族解放戦争の「戦争の記憶」を考える際には、そのようなナショナリズムの変化が引き起こす「戦争の記憶」のあり方や政治的機能の

変化に注意しておく必要があります。この論文では、改革開放政策を採択し、さらに冷戦構造が崩壊した後のベトナムにおいて、「戦争の記憶」のありようがどのような変化をしたのか、そしてどのような政治的機能を果たしているのかを検討していきたいと思います。

1. ドイモイ(Doi Moi)の進展と「戦争の記憶」:

冷戦期型からドイモイ期型へ

ベトナム共産党は、一九四五年の八月革命の中核勢力として、ベトナムをフランス領植民地から独立させ、一九四六〜一九五四年の抗仏戦争、一九五四〜一九七五年の「抗米救国」戦争を勝利に導き、ベトナムの民族解放・南北統一を成し遂げました。この偉業はベトナム共産党の政治的正統性の主要な源泉となっています。このことから共産党の政治的優越性は、共産党だけが民族独立をもたらすことのできた唯一の政治勢力である点だと説明され、これらの民族解放戦争勝利の「戦争の記憶」は、共産党の政治的正統性をベトナムの人々の頭に刻み込み、思い起こさせるものとなっています。

このように共産党支配体制の正統化をはかる「政治的資源」として「戦争の記憶」は、抗仏戦争終結以来ずっと利用・動員されてきましたが、一九八六年十二月の第六回ベトナム共産党大会でドイモイ(刷新)路線が採択され、ドイモイ下において、その利用・動員の仕方の変化を余儀なくされました。冷戦期型の「戦争の記憶」をドイモイ期型のそれへと転換を迫

られたといえます。その要因として幾つかの点が考えられます。まず、社会主義的市場経済の導入、西側を含めた多極的外交の展開などを柱とする改革開放政策を推進する上で、従来の冷戦期型ような「戦争の記憶」の動員の仕方が不適切になってきたことがあります。冷戦期型の「戦争の記憶」の動員の仕方とは、敵か味方かの厳格な二分法に立って、敵である旧南ベトナム政府・軍関係者や国内外の階級敵を差別し、共産党をはじめとする世界の「革命潮流」の勝利・栄光を誇示するものであったといえます。改革開放政策で近代化・工業化を進めていくのには、必要な人材を階級・地域を越えて結集・活用する必要があるわけですが、階級間、地域間（特に南北間）の対立、あるいは西側諸国との対立を助長するような冷戦期型の「戦争の記憶」の動員はトーンダウンせざるをえない状況が生まれました。

一九八〇年代の末に「階級出自主義（「履歴主義」）」を緩和するような措置がとられています³が、「民族的調和」や「民族的和解」を図って、経済発展をめざすような「戦争の記憶」の動員が変わっていく必要があったわけです。ここで注意すべきことは、冷戦期型とドイモイ期型は、根本的な質の違いというよりは、温度差の違いにすぎない点です。ただし、後述するように、ドイモイ型には新しい面が加味されるようになっていきます。

他方で、八〇年代末から九〇年代初頭に旧ソ連や東欧の社会主義政権が倒れ、冷戦構造の崩壊の中で、ベトナム共産党は一党独裁体制の正統化の再構築を迫られました。その一環として、「ホーチミン（Ho Chi Minh）思想」の公式イデオロギー化と「歴史の力」の動員がはかられました。ド

イモイ以前には「ホーチミン思想」といういい方がされたことはなく、一九九一年の第七回党大会で、はじめてこの言葉が使われるようになりました。これは冷戦体制が崩壊し、社会主義に対する信念危機が高まる中で、「ホーチミン思想」をテコに社会主義体制の正統性を維持しようとしたところから出されたものだと考えられます。社会主義というのはホー・チ・ミンが選択した道だということで正統化する。また、ホー・チ・ミンの唱えた社会主義は、一九七五年から一九八六年の間の指導者の社会主義とは異なるものだということで、それまでの政策を非正統化し、ドイモイ路線を正統化していったわけです。ホー・チ・ミンは、階級と民族、ナショナリズムとインターナショナリズム、民族独立と社会主義の結合のシンボルだとされました⁴。

八〇年代の末に、共産党に対する様々な批判が表面化し、その中には複数政党制を主張する声も国内外からあがっていました。共産党はあくまでも一党独裁体制を堅持することを主張しました。その論拠は政治的安定とその下での経済の発展であり、複数政党制を認めることは政治的不安定につながり、政治的不安定になれば経済発展を進めることはできないという論理で、一党独裁体制を正統化していったわけです。このように「ホーチミン思想」や経済発展の論理による共産党支配体制の正統化の再構築とならんで、ポスト冷戦期の「和平演変」への警戒が高まる中で、冷戦期型の「戦争の記憶」も、「歴史の力」つまり共産党だけが歴史的に民族独立をもたらすことができた唯一のものであることを喚起するものとして動員・活用され続けている側面もあります。

この時期の「戦争の記憶」のあり方に変化を引き起こした他の要因として、ベトナム戦争のさまざまな後遺症の深刻化があります。烈士（革命勢力の戦没者）の家族（とりわけ高齢化した父母）や傷痍軍人の生活保障、戦争による精神障害者、枯れ葉剤によると考えられている奇形児や環境破壊などが大きな社会問題として浮上してきました。このような中で、輝かしい栄光の「戦争の記憶」だけを強調することは、人々の実感との乖離を引き起こします。ちなみに、文芸などにおいては、戦争の負の面を含んだ戦争の語り方が表面化ようになってきていました。さらに、ベトナム戦争終結後、四半世紀が経過し、「戦争の記憶」が風化してきていること、戦争を知らない戦後生まれの人が総人口の半数近くになっているといった、「戦争の記憶」を動員するための「基盤」が揺らいできているといった事情もあります。このような「戦争の記憶」を取り巻く環境の変化の中で、冷戦期型の「戦争の記憶」の動員だけではすまなくなつたといえます。

Ⅱ. 公式的な「戦争の記憶」：国家の記憶、集団の記憶

ベトナムにおける公式的な「戦争の記憶」は、共産党や国家によって打ち出された公式的な戦争像で、それはさまざまな装置を使ってベトナムの人々に刻印・想起されるものになっています。

1. ベトナムにおける「戦争の記憶」

国家によって定められた戦争に関する記念日は、ベトナムにはかなりた

くさんあります。代表的なものとしては、四月三〇日の「解放記念日」（一九七五年のサイゴン解放を記念する日）、七月二六日の「戦没者の日」（戦没者や傷痍軍人を記念する日）、十月十日の「首都ハノイ解放記念日」（一九五四年に抗仏戦争が終結した記念日）などがあります。いずれも抗仏戦争とベトナム戦争に関連する記念日であり、カンボジア紛争（ベトナム軍のカンボジア駐留は一九七八～一九八九年）、中越戦争（一九七九年）に関しては殆どないといってよいでしょう。これからも窺えるように、ベトナムにおける公式的「戦争の記憶」というのは、ベトナム戦争、抗仏戦争に多くかわつているといえます。ドイモイ以降、カンボジア紛争や中越戦争について、公の場で、小説、回想記などで言及されることはあまり多くはありません。圧倒的に抗仏戦争、ベトナム戦争が多いと言っているでしょう。これはいうまでもなく、「戦争の記憶」を民族解放戦争の輝かしい勝利と結びつけたいからに他なりません。

ベトナム文学研究家のグエン・フン・クオック（Nguyen Hung Quoc）は、抗仏戦争、抗米戦争の時には、それらの戦争をテーマとした良い作品も残つたのに、カンボジアや中国との戦争では、それをテーマとした文学作品は非常に少なく、よい作品も殆どない、ということをおっしゃいます⁶。このようにカンボジア紛争や中越戦争に関する言及が少ないのは、これらの戦争が短期間であつたこと、カンボジア紛争については国内外に正当性について疑問視する声があること、中越戦争に関しては対中国関係を配慮せざるをえない面があるからだと考えられます。

2. ベトナム戦争の公式的な「戦争の記憶」

上でみたように、ベトナムにおける「戦争の記憶」の主要部分を構成しているのはベトナム戦争になりますが、そのベトナム戦争の公式的な「戦争の記憶」についてみていきます。ベトナム以外の国においては一般に「ベトナム戦争」といわれていますが、ベトナム国内では「抗米救国抗戦 (Khang Chien Chong My Cau Quoc)」⁷という言い方をします。この言い方はベトナムにおけるこの戦争に対する公式的な捉え方を端的に表現しています。つまり、ベトナム戦争はアメリカ帝国主義の侵略に対する「抗米救国抗戦」であり、共産党の指導により、ベトナム人民は軍民一体となつて英雄的に戦い、輝かしい勝利をおさめた戦争であることを強調した言い方になります⁷。ベトナム戦争終結の翌年一九七六年の第四回党大会の政治報告では、抗米救国の事業におけるベトナム人民の勝利は、「最も輝かしい頁の一つ、革命的英雄主義と人類の智慧の全勝に関する鮮やかな姿がわが民族史に永遠に記され、二〇世紀の偉大な戦功、大きな国際的重要性と深い時代性をもった事件として世界史に入れられるであろう」と自らを高らかに称賛しており、この文言からは、ベトナムが世界史の先頭を走っているのだとの自負が窺えます。

ベトナム戦争に関する公式的見解すなわち公式的な「戦争の記憶」の内容は、共産党・国家によって決められます。ベトナム戦争に関するベトナム側の総括が、ベトナム戦争終結二〇周年にあたり、アメリカとの外交関係を樹立した一九九五年に、『抗米救国抗戦の総括：勝利と教訓』⁸として出版されました。この本では、最後の総括の冒頭で「抗米救国の抗戦に

おける我が人民の勝利は、わが党とホー・チ・ミン主席の指導による民族解放・社会解放の最も偉大な成果である」とされています。抗仏戦争と比較して、ベトナム戦争の新しい点として四点が挙げられています。^①アメリカ帝国主義の新植民地侵略戦争に対する正義の戦争である。^②わが人民の正義の輝かしい抗米救国抗戦は、民族解放の性格を帯びるとともに、祖国防衛の性格も帯びている。^③わが人民の抗米救国抗戦は、ラオス人民やカンボジア人民との戦闘同盟の性格を帯びている。^④わが人民の抗米救国抗戦は、深い時代的品格を帯びている。これにみられるように、アメリカ帝国主義がベトナムを侵略し、ベトナムはアメリカ帝国主義の侵略に抵抗した正義の戦争、という基本的構図をあらためて強調しています。

公式的な「戦争の記憶」は、次節でも触れますが、さまざまなかたちで人民に伝えられています。戦争についての研究・教育や文学・芸術なども、基本的に、この公式的な「戦争の記憶」の枠をはみ出すことはできません。ベトナム国内における高校用の「歴史」教科書（第一次世界大戦後から現在までを扱う現代史編一九九五年版）⁹では、全二〇〇頁中、約五〇頁をさいてベトナム戦争を記述しています。「抗米救国抗戦」の意義として、民族的意義（ベトナムにおける帝国主義と封建制度の支配を終わらせたこと）と国際的意義（帝国主義に対抗する世界の革命運動を強化したこと）が挙げられ、ベトナム戦争勝利の原因として、正しく創造的な自主独立軍事路線・政治路線を採った共産党の指導がまず第一に挙げられています。

3. 公式的な「戦争の記憶」の刻印、想起

公式的な「戦争の記憶」が刻印され想起される装置についてみていきます。政治学習・宣伝、学校教育、文芸、マスメディアなどが、その装置として考えられますが、ここでは建造物、キャンペーン、顕彰などについてみていきます。まず建造物としては、各種博物館¹⁰、文化省の指定による革命遺跡などがあります¹¹。それらの資料の公開の展示においては、帝国主義者・植民地主義者やその傀儡政権が如何に苛酷な統治を行い、ベトナム人民がいかに悲惨な目にあつていたかということと、それらの帝国主義・植民地主義と傀儡政権にベトナム人民がいかに勇敢に戦ったのが対照的に示されています。またベトナムでは各町村ごとに必ずといっていいくらい戦没者慰霊碑公園がつくられています。九〇年代に入つて、立派な戦没者慰霊碑公園が次々と建設されています。この集団慰霊碑にはたいがい「いつまでも戦没者英雄の恩を忘れない」という文句が刻まれています。

「戦争の記憶」を刻印・想起する活動としては、上述した記念日での記念行事のほかに、キャンペーンや顕彰があります。「戦争の記憶」に関するキャンペーンとしては、最近の代表的な例では、「恩義に報いる運動」というのがあります。これは一九九七年から始められている運動であり、「傷痍軍人と烈士の日」五〇周年に際して発動され、スローガンとしては「水を飲んだら水源を思い出せ」、「恩義に報いる」などが掲げられています。それらのスローガンは、国のために戦争の犠牲になった人々の功績を忘れるなということを意味しているわけです。この運動では、傷痍軍人や烈士の遺族で身よりのいない人を収容する社会福祉施設である「情義の

家」、そういった施設の建設、傷痍軍人や烈士の家族への援助、あるいは「英雄的ベトナムの母」への贈与を行っています。「英雄的ベトナムの母」とは、息子を兵士として送り、戦死した息子を複数持つ母親に贈られる称号で、一九九四年に制定されました。文学においては、戦争をテーマにした文学を書くというキャンペーンも行われています¹²。

次に顕彰行為についてですが、ベトナムの顕彰は称号と勲章の授与によって行われています。その中には戦争にかかわるものが大きな位置を占めています。一九九八年の国家による顕彰の状況¹³をみてみると、如何に戦争関連の受賞者が多いかがわかります。

またこれは必ずしも「戦争の記憶」と直接つながらないかもしれませんが、ベトナムでは戦争に功績のあった人への「優遇制度」がとられています。一九五〇年代から導入されており、一九九五年に整備された政令が公布されています¹⁴。この優遇制度では、年金の給付や入学や就職において、革命や戦争に功績ある人の子弟に対しては優先的に待遇をおこなうことになっています。

以上、「戦争の記憶」を刻印・想起する装置についてみてきたわけですが、一九九〇年代に入ってから、公式的な「戦争の記憶」の刻印・想起に、ベトナム共産党やベトナム政府は相当の努力を払ってきているということが窺えるのではないかといえます。

Ⅲ. 文芸にみられる「戦争の記憶」：個人的記憶、私的記憶

ベトナムにおいて、戦争（特にベトナム戦争）の個人的体験が文学作品の中でどのように語られてきたのかということを見ていきたいと思います¹⁵。ベトナムにおける文芸は、基本的には、党・国家の指導の下にあり、公式的な「戦争の記憶」を伝達・普及する役目の一翼を担っています。しかしながら、公式的な「戦争の記憶」が集団的な記憶であるのに対し、文芸にみられる「戦争の記憶」は作品の登場人物の個人的体験を通して表現される個人的な「戦争の記憶」であるともいえます。文芸作品として公にされる個人的記憶は、公式的記憶の枠をはみだすことは難しいところがありますが、他方で、個人的体験と公式的記憶の内容があまりに乖離することとは公式的記憶の説得力を失わせることになります。公式的記憶に回収されない個人的記憶は私的記憶として公にはされないことになります。

以下では、ベトナム戦争からドイモイ期にいたるまでの、文芸にみられるベトナム戦争の語り方の変遷を辿ります。

1. ベトナム戦争中

ベトナム戦争中は、まずもって戦意高揚のための戦争の語り方でありました。基本的には、「革命的英雄主義」に基いて文学が創作されています。ここでいう「英雄」とは、道徳的という意味も含めて完全完璧、堅強不屈で機略に富み、共産党に絶対忠誠という人物だとされます。この最も典型的な例が『あの人の生きたように』（一九六五年）¹⁶です。グエン・バン・チヨイ（Nguyen Van Troi）という南部の革命戦士を扱った作品で、当時のアメリカ国防長官マクナ马拉がベトナムに視察にきたとき、彼を暗殺し

ようとして捕まり、処刑された人物の話であります。チヨイの英雄的なふるまいをみならおうとする妻の手記風に構成されたのがこの作品であり、チヨイは「革命的英雄主義」の典型としてとりあげられ、当時盛んに宣伝されました。このようにこの時期の文学作品は、戦意高揚のために、鑑となる「英雄」の姿を書いていたのです。その一方で戦意を挫くような描写は禁止され、実際、その禁止にひつかかるような筆禍事件が起きています。一九七一年、グエン・ズイ（Nguyen Duy）という詩人は、銃後にいた母親が生活に困って乞食をするという描写をしたために発禁処分を受けています。ファム・ティエン・ズアット（Pham Tien Duat）という詩人は戦死者の葬儀の場面を克明に描いたために、これも発禁処分を受けています¹⁷。記録映画や写真といった映像についても、人民軍の戦死者の映像を映さないようにするなど、この時期には文学と同じような制限が行われました。

2. ベトナム戦争終結直後

一九七五年にベトナム戦争が終結し、その直後は勝利の高揚感というものがあり、その戦歴を誇る高級軍人のベトナム戦争に関する回想記が幾つか出ています。その代表的なものとしてはヴァン・ティエン・ズン（Van Tien Dung）（当時の人民軍総参謀長）の『サイゴン解放作戦秘録』¹⁸や南ベトナム民族解放戦線の上将であったチャン・ヴァン・チャー（Tran Van Trai）の回想記¹⁹があります。この二つには、重要な性格の違いもありますが²⁰、いずれもベトナム戦争は正義の戦争であることを示し、自分たち

の輝かしい戦歴や「われわれの英雄性」を賞賛するものでありました。いうまでもなく、ここでの「われわれ」には、旧南ベトナム政府系の人々は含まれていません。ともあれ、世界の最強国アメリカ帝国主義との戦いに勝利したのだという、自画自賛する語りであったといえます。

3. 一九七〇年代末から一九八〇年代初頭

称賛型の語り方が変化をみせていくのが、一九七八、七九年のちょうどカンボジア紛争や中越戦争が始まった時期になります。その先駆けになったのが、従軍作家グエン・ミン・チャウ (Nguyen Minh Chau) の有名なエッセー「戦争について書くこと」²¹ (一九七八年) であります。従来のベトナム文学の社会主義リアリズムのあり方、とりわけ戦争の描き方を批判したもので、現実とはかけ離れた、こうあるべきだという姿ばかりを、ベトナム文学あるいは戦争の語りはしてきたのだということをはじめて批判的に指摘した画期的エッセーであります。創作としては、ヴー・キー・ラン (Vu Ky Lan) とグエン・シン (Nguyen Sinh) の共著『戦火の地の記事』(一九七九年)という作品で、はじめて戦争の悲惨さ、勝利の死の代償がいかに大きかったかということについて触れられるようになった²²と言われています。もちろんこれらの作品において、戦争の正義性・英雄性というのは否定されているわけではありません。

一九八〇年代に入ると、登場人物の英雄性が少し低下し、人間としての卑小さを含ませ持っていたり、あるいは戦争による痛みを抱えた人物像と、従来のような英雄的人物像が混合された中間的な形態のものがいくつか出

てくるようになります。その最も代表的な作品としては、スアン・ドゥック (Xuan Duc) の『風の扉』(一九八一年)が挙げられます。

一九七九年以降から八〇年代半ばまでの時期、かつての「勝利は革命の必然」というような²²捉え方から、より客観的に戦争がみられるようになりまし。個々の軍事指導の誤りや、勝利の栄光の中の傷ましい犠牲も描かれるようになりました。そして人物像はかつての「革命的英雄主義」にもとづく非常に完璧で理想的な人物から、確かに戦闘の英雄でもあるけれど、欠点もある、卑小な部分もある人物として描かれるものが主流になってきます。

4. 一九八〇年代末以降

さらに一九八〇年代の末になると「反抗文学」(van chung phan khang) の作品がたくさん出てきます。この「反抗文学」の中では戦争の悲惨さが人間の運命や内面世界を通して表現されるようになっていきます。代表的なものとして三つを取り上げます。レ・リュウ (Le Luu) 『寂しく遠い時』²³ (一九八七年)、バオ・ニン (Bao Ninh) 『戦争の悲しみ』(一九九一年)²⁴、ズオン・トゥー・フオン (Duong Thu Huong) の『無題小説』²⁵ (一九九〇年)。前の二作品は、国内の文学賞を受賞している著名な作品です。三つ目の『無題小説』の作者ズオン・トゥー・フオンは「反抗文学」の最も代表的な文学者の一人で、一九九〇年に共産党から党籍を剥奪され、国内では作品が出版できない状況にあり、そのため『無題小説』は国外で出版されました。上の三つの小説はいずれも、如何に戦争で悲惨

な体験をし、それが人間性というものを歪めてしまったのかということを経験している点で共通しています。いずれの小説の主人公も、戦争に従軍している兵士なわけですが、かつての「英雄」のように、民族解放の大義のために全身全霊を傾けて献身しているといった晴れがましきはなく、戦争のもたらした悲しみを湛えた存在であることが前面に出ています。『寂しく遠い時』では、個人の幸福より家族や職場の名誉が上位に置かれています。主人公サイ(Say)の戦闘への動機は愛国心のためであるとともに、結婚生活の不幸を忘れるためという私的事情によるものと設定されています。『戦争の悲しみ』では、愛し合っていた二人の人間関係が戦争によって切断されてしまった悲しみが描かれ、集団の英雄的行為としての戦争ではなく、個人の喪失感と悲しみから戦争を捉える姿勢が窺えます。『無題小説』では、飢え、病氣(主にマラリア)、精神的障害、性欲、野獣などに苦しめられるジャングルの兵士の悲惨な様子が詳細に描かれるとともに、人民軍の中で発生していた逃亡兵問題や味方への誤射などにも触れられています。この作品は、戦争中には戦うことがベトナム民族にとっての「高貴な歴史的使命」だと思ひ込まれ、若者はそれに魅せられるようにして動員されていたことを批判的に指摘しています。

これらの作品に対しては、ベトナム国内ではかなり強い抵抗や反発もありました。とりわけバオ・ニンについては、批判的な記事が新聞・雑誌に相当数掲載されました。特に軍関係者からの反発は強いものでありました。批判点として次のような点が挙げられています。『戦争の悲しみ』は戦争の悲惨な否定的側面だけが描かれていて一面的であり、「抗米救国抗戦」

の英雄的側面が描かれていない。輝かしいベトナム人民軍の歴史を汚すものであり、ひいては戦没者とその遺族を冒瀆するものである。救国戦争と侵略戦争を区別していない、など²⁶。しかしながら、『戦争の悲しみ』がこの時期に曲がりなりにも公にされてきたということは、戦争の悲惨さ・痛みを持つ「戦争の記憶」のあり方を排除してしまつたら、公式的な「戦争の記憶」の存在も揺らぎかねない、そういう思惑もあつて、ベトナム戦争の正義性を否定しない限り、こういう傾向のものも完全には拒否することができなかったのではないかと考えられます。

以上、文芸において、ベトナム戦争の語られ方は、「英雄的な正義の行為の物語」から、一九八〇年代の末以降、「わたしにとつての悲惨な体験」を語るものが多くなってきたということができます。文芸における実在あるいは虚構の個人の戦争体験を通して、公式的な「戦争の記憶」では表れにくい、もしくは隠蔽されていた、非英雄的側面、戦争の悲惨な側面というものが浮き彫りにされるようになってきたのです。

IV. ベトナム戦争に関する「戦争の記憶」の多様性

ここでは、単にベトナム国内だけではなく、二〇〇万人ともいわれる越僑(海外在住ベトナム人)の人々のもっている「戦争の記憶」も含めて、「戦争の記憶」の多様性をみていきます。地域や世代や社会階層、あるいは性によって「戦争の記憶」は多様であるといえます。しかしながらベトナム国内においては、ベトナム戦争というものが正義の戦争であつたとい

うことについて、否定するような論調が公になることはありません。つまり国内において、国家による公式的な「戦争の記憶」は根本的に否定されることはなく、「反抗文学」などで表現されている個人的戦争体験を公式的な「戦争の記憶」により取り込もうという動きが、八〇年代の末から行われていたのではないかと考えられます。しかし、国外を含めて考えると、公式的な「戦争の記憶」を否定するような「戦争の記憶」、すなわち「対抗記憶」も存在しております。

以下では、「戦争の記憶」の多様性を、三つの論点で整理してみたいと思います。

1. 正義か非正義か

ベトナム国内の論調では、ベトナム戦争を民族解放の「抗米救国」戦争として、正義の戦争として捉えられていて、これを公然と否定するものは殆どありません。この場合、「防衛者ベトナム⇄侵略者アメリカ」の戦いという図式が前面にでてきます。一方、例えば海外在住の反体制的ベトナム系の人々の中には、このベトナム戦争を「内戦」としてとらえ、「北ベトナム⇄南ベトナム」の戦いで、北が南を侵略してきた非正義の戦争として捉える人もいます。その場合、「ベトナム⇄アメリカ」という図式よりも「北ベトナム⇄南ベトナム」という戦いの図式が前面にでてきます。このような立場で書かれた文学作品としては、グエン・モン・ザック(Nguyen Mong Giac)の『他郷』²⁷、カオ・スアン・フイ(Cao Xuan Huy)の『銃の折れた三月』²⁸などがあり、いずれも旧南ベトナム出身者によるもので、

ベトナム国外で出版されています。ベトナム国内でこのような論調が公然とでてくることはまずありません。ただし、先ほどあげたズオン・トゥー・フオンは国内に在住していますが、特殊なケースです。フオンは、ベトナム戦争に民族解放の正義があったということを否定していませんが、あの戦争は「抗米救国」の民族解放戦争というだけではなく、「内戦」という面やイデオロギー代理戦争という面もあるのだということを示し、両者の中間的な立場をとっています。バオ・ニンについても、「アメリカ帝国主義の被害者である我々を、戦争を引き起こした犯人だとしている」と指摘するむきもあります。

2. 人道的か非人道的か

ベトナム人にとっては「抗米救国抗戦」を戦うことこそが人道性を発揮することであるという考え方、つまり侵略に抵抗して独立を守ることこそ正義であり、人道性を確保することであるという見方を、戦争中あるいは戦争終結直後のベトナム戦争に関する称賛的な語りはとっています。一九八〇年代半ば以降の戦争についての語りの中でもこういったものはありますが、少し色合いが異なってきた面もあります。例えばグエン・ミン・チャウの場合がそうで、人道性を発揮する英雄的な面もあるが、戦争指導のミスによって悲惨な目にあわされながらも果たさなければならぬ道義的義務としての面にも着目しています。さらに、ベトナム戦争が正義の戦争であったことは否定しないが、戦争というのは非人道的な行為であって、人間関係、人間性、人格というものを破壊する性格を持ったもの

だという考え方があります。『戦争の悲しみ』の作者バオ・ニンなどはこの立場にたっていると思われます。

3. 戦争か平和的方法か

旧北ベトナム出身のベトナム戦争体験世代は、個々の戦争指導に疑問を投げかけたりしたとしても、ベトナム戦争の全体的意義を根本的に否定するということはまずないのではないかと思います。あまりに犠牲が大きすぎたという批判はあっても、民族独立を確保する意義ある戦争であったという線は崩さず持っていると思います。バオ・ニンも表向きはこの点を否定していません。しかし最近、若い世代の知識人の間では、果たしてベトナム戦争はやる必要があったのか、戦わなくても独立を獲得する他の平和的方法があったのではないかという議論が水面下でできているということです。

以上、三つの論点から「戦争の記憶」の多様性を整理してみました。ベトナム戦争の正義性を否定し、他の選択肢の妥当性を主張する意見は、公式的な「戦争の記憶」と真つ向から対立し、ベトナム国内で公然と主張するのは非常に困難な状況にあります。また国外の過激な反共的傾向の人々の「対抗記憶」が、国内の人々の広い支持をえられるものとも思われません。現在、国内において、人道性についての議論はわかるものの、正義性と戦争という手段を選択したことの正当性を否定し、公式的な「戦争の記憶」に根本から対抗するような有力な「戦争の記憶」は見あたりま

せん。もしあるとしたら、それは公式的な「戦争の記憶」を無効化する「戦争の記憶への無関心」だけだと考えられます。

V. ドイモイ下における「戦争の記憶」の政治的機能

ドイモイ下、とりわけ一九九〇年代に入って、ベトナム戦争に関する「戦争の記憶」がどのような政治的機能を果たしているのかをみていきます。

1. 公式的な「戦争の記憶」の動員：直接的動員、間接的動員

国家による公式的な「戦争の記憶」は、一九七五年からドイモイまでは冷戦期型として存在してきました。ドイモイ下においては、冷戦期型記憶は改革開放政策の推進にとつては適合的ではない面をもっており、ドイモイ期型へと調整されました。しかしながら冷戦構造崩壊後、改革開放政策を進める一方で「和平演変」への警戒もあり、冷戦期型への揺り戻しの側面も同時にみられます。そこでは共産党の「歴史の力」と西側への警戒感を喚起するものとして「戦争の記憶」が利用されています。その際、「アメリカ帝国主義にベトナムは勝利した」とする直接的な記憶の宣伝・動員のあり方もありますが、間接的な記憶の宣伝・動員の利用もあります。これはズオン・トゥー・フオンがあるエッセー²⁹の中で書いていたことです。たとえば一九九〇年ユーゴスラビアでNATO軍による空爆が行われた時、ベトナム共産党機関紙『ニャンザン (Nhan Dan)』は、連日それに対する反対キャンペーンを繰り広げました。それは、市場経済化をめざ

し、アメリカとの関係強化に腐心していたと思われていた中で、どうして敢えてそのような反米的行動をするのか、一見不可解な行為に思えたわけです。ではなぜそのような反米キャンペーンをしたかという点、アメリカの帝国主義的な振る舞いに対して、共産党はあくまでも反対するのだという姿勢を示し、ひいてはアメリカ帝国主義に勝利したベトナム共産党の栄光を呼び覚ますという構図になっているからだ、とフオンは指摘しています。これが間接的な記憶の動員の仕方になります。

このように公式的な「戦争の記憶」の動員は、ベトナム共産党や人民軍の過去の栄光を呼び覚ますとともに、「和平演変」警戒論と結びつき、軍部あるいは軍出身の指導者の存在感や権威を高める機能ももっているといえます。現在のレ・カ・ヒュウ (Le Kha Phieu) 書記長は、ベトナム共産党書記長としては初めての軍出身者（人民軍政治総局出身）であり、レ・カ・ヒュウ体制になってから、戦争や軍隊に関連した記念行事が盛大になってきているのはあながち偶然ではありません。

2. 「哀悼の共有」と「戦友意識の鼓舞」

ドイモイ下の一九八〇年代末以降、ドイモイ期型の「戦争の記憶」として新たに加味されるようになったものに、「哀悼の共有」や「戦友意識の鼓舞」があります。これらが利用されて、ドイモイ以降、課題とされてきた国民的な一体感の醸成がはかれるようになっていたのではないかと考えられます。特に一体感で問題になるのが南北間、旧南ベトナムと旧北ベトナムとの一体感の問題になります。この南北間の一体感の醸成を強調す

る背景には、経済発展をはかるのに南部や越僑の役割がきわめて重要であること、ブイ・ティン (Bui Tin) やグエン・ヴァン・チャン (Nguyen Van Tran) (彼らは共産党員で高級幹部であった人たちですが) などの人々から、南北統一尚早論とか連邦制論³⁰が出てきていることもあって、これらに対抗する意味においても、南北一体感の醸成が非常に重要な課題になっていたといえます。

「哀悼の共有」が利用・動員されている例として、一九九六年に制作された映画「遙かな旅」(原題: Ai Xươt Van Ly) があります。死んだ戦友の遺骨をその母親に送り届けるという話なのですが、その際に主人公の人民軍兵士とヒロインの南ベトナム解放戦線の兵士が戦友であり、それにたまたま同道したかつての旧南ベトナム軍政府兵士と一緒に遺骨を送り届ける話です。最終的には、亡くなった兵士を悼むということをこの三者が共有することによって、一体感を味わうという構図になっている映画です。ドイモイ以降、このような遺骨収集・納骨をテーマとした映画がたびたびつくられております。「哀悼の共有」を通して、北ベトナムの人々も旧解放戦線の人も南ベトナムの人々も同じベトナム民族、国民としての一体感を持つような「戦争の記憶」の呼び起こし方がなされているのではないかと考えます。ただし、公の場では、旧南ベトナム政府軍兵士に対する「哀悼の共有」には到っていないことを付言しておきます。

一九九五年の米・越外交関係樹立に向けて、そのための地ならしとしての「哀悼の共有」という「戦争の記憶」の利用の仕方もあったのではないかと思います。戦争を主題とする米越合本小説集³¹が一九九五年（外交

関係樹立の年」にアメリカ人、国内のベトナム人、国外脱出したベトナム系アメリカ人の三人の編集者によって出版されています。これは「苦しみの共有と和解の必要性」、「痛ましい真実を語る文学の必要性」についての合意から出発した成果であり、「哀悼の共有」を利用した例だといえます。

「哀悼の共有」は、国民的融和や、かつての敵対勢力との融和をはかる有力な取っ掛かりとして機能しています。ただし、かつての南ベトナム政府軍兵士はまだ哀悼の対象とされていないなど、その共有には依然制限があります。

次に、「戦友意識の鼓舞」についてみていきます。退役軍人は、共産党支配体制の有力な支持者であるとともに、批判者でもあります。八〇年代の未以降、国内で大きな批判の運動がある場合、大抵、退役軍人がかかわっています。八〇年代末には、退役軍人会の「抗戦者クラブ」が「民主化運動」の推進勢力の一つとなりました³²。一九九七年の夏に北ベトナムのタイビン (Phai Binh) 省で大規模な農民反乱がありました³³が、それも在地の退役軍人の人たちがリーダーとなって起こしたといわれています。退役軍人をいかに宥めるかが大事な政治課題になっているわけですが、それに対しては「戦友意識の鼓舞」が行われています。具体的な例としては、「昔の戦場に戻って同隊(戦死した戦友)を探す」運動³⁴などが行われています。あるいは文学でも戦友意識をテーマにしたものが多く書かれています。この戦友意識において、かつて同じ軍隊の釜の飯を食ったということで、国家指導者も自分も同じ戦友だという意識でとらえるわけですから、

国家指導者に対する一体感を持たせ、さらには体制側に取り込んでいくという意味があります。しかしそれと同時に自分は対等である、意見を主張できるという意識にもつながっています。この「戦友意識の鼓舞」は、支配層との一体感を作ることと、対等意識を作ることという二面性(時には両刃の剣となる)があるかと思っています。

このように、国民的一体感をつくるために「哀悼の共有」・「戦友意識の鼓舞」が使われているのではないかと考えられます。これらはドイモイ期型「戦争の記憶」の新しい要素だといえます。

3 「戦争の記憶」とローカル・アイデンティティー

ドイモイ以前、とりわけベトナム戦争中は、「家族」や「村落」といった中間団体への帰属意識は抑制されていた面があり、階級や民族・国家への直接的忠誠が強調されていました。例えば、レ・ティ (Le Thi) は「ベトナムの家族…受動的傾向から主導的傾向への変化」という新聞記事の中で、戦争中「青年男女は家族と離れて戦場に赴いた。家族のことにあまりとらわれるのは、個人主義的、プチブル的だとみなされた」³⁴と指摘しています。また、チュウ・フィは、「人々は一時的に妻子、家族、郷里と離れ、民族全体にとって高貴で神聖なことに没入した。そんな時、村落共同体の意識は減じ、それにかわったのは民族共同体意識であった。(中略) 戦闘生活は国中の多くの場所にかれらを連れて行き、かれらはどこでもそこが故郷であると感じていた」³⁵と述べています。

ドイモイ以降、家族や村落の役割が見直されるようになりました。農業

においては、従来の農業合作社から個々の農家が農業経営の主体となるようになるなど、家族の位置と役割の回復が求められるようになったのです。そのような中で、かつて禁じられていた「家譜」が表に出るようになり、夫婦・親子・子弟の間の神聖な感情、祖先の恩を知る心、親族への関心が高く掲げられるようになっていきます。村落においても、村祭りや「郷約」が復活するなど、伝統的な村落の紐帯が見直されるようになっていきます。これは、家族や村落への帰属意識（ローカル・アイデンティティ）や愛着を通して、国民統合のあり方を再編していこうとする動きだと考えられます。

このような動きに伴って、家族や村落の「戦争の記憶」が掘り起こされるようになってきています。それは例えば、地方史編纂での戦争関連の記述や資料づくり、村落で建設する戦没者慰霊碑公園等々でかたちにされています。このように、「戦争の記憶」は、かつての「大きな物語」一辺倒から個人・家族・村落といったローカル・アイデンティティに分節化することによって補強されるようになっていくなかです。

4. 「戦争の記憶」と各世代の政治意識

戦争体験世代にとつて、民族解放闘争の「戦争の記憶」は自らの人生の証や誇りとなっている面があります。このような心情は現体制への忠誠心へと結びつけられてきました。体制を防衛するための「戦争の記憶」の利用としては、戦争時の死への脅威やつらい体験への忌避感が利用されている面もあります。これは消極的な利用といえ、「戦争の記憶」の利用・動

員というのには語弊があるかもしれませんが。ベトナムは長い間ずっと戦争をしてきて、人々の間には、もう戦争はこりごりだという心理状況があります。いくら現状の政治に不満があつたとしても、戦争の時よりはましであるという忍従の意識がベトナムの人々の心の中には非常に根深くあり、現実から目を背けて過去の栄光に逃避する傾向がある、それがベトナムの人々の政治意識向上にとつての大きな障害になっている、とズオン・トゥー・フオンは指摘しています。このような意識構造が、共産党の一党独裁下での「政治的安定」を下ざさえている、ということです。

ベトナム戦争後に生まれた世代が総人口の半数近くを占めるようになり、その上、ドイモイ下でベトナム社会は大きな変貌をとげ、人々の価値観や規範意識も大きく変化しました。拝金主義が横行し、道徳観の喪失を危惧する識者の人々も多数います。そのような中で、「水を飲んだら水源を忘れない」、「情義を重んじる」などの「伝統的」価値観を継承し教育するための手段の一つとして、「戦争の記憶」の利用が考えられています。映画「遙かな旅」の監督レ・ホアン（Le Hoan）の場合がそうです。当然、この場合、民族解放戦争は称賛する方向で捉えられることになります。先に述べた「恩義に報いる運動」などのキャンペーン運動もそういった目的をもっています。しかしながら、これらの教育・宣伝が戦後世代に対しどれだけ効果をもつのかは、かなり疑問といわざるをえません。

以上みてきたように、かつて世界史の先進性を意味していたベトナム戦争の「戦争の記憶」は後退し、概して、「戦争の記憶」は共産党一党独裁

体制を維持する「保守的」な政治機能を果たすようになってきている側面があるといえます。それは、冷戦期的思考を温存させ、共産党・軍の権威を高め、ベトナム人民の政治的忍従の培養土となっています。ドイモイ下になって、「哀悼の共有」や「戦友意識の鼓舞」のような新たな国民統合のあり方を示す面も出てきていますが、おそらく「戦争の記憶」の「保守的」な政治機能に国内で対抗する最大のものは、戦後世代における、「戦争の記憶」にとらわれない「過去を問わず、未来を志向する」動きになるかと思えます。

まとめ

「戦争の記憶」はベトナム共産党の政治的正統性の源泉として利用・動員されてきた。ドイモイ下、改革開放政策に対応して、「戦争の記憶」は冷戦期型を緩和する方向でドイモイ期型に調整された。ドイモイ期型には「哀悼の共有」、「戦友意識の鼓舞」、ローカル・アイデンティティーの援用といった要素が加味されるようになっていく。公式的「戦争の記憶」は、八〇年代から噴出してきた「わたしにとつての悲惨な体験」を無視するわけにはいなくなった。ドイモイ期、これらの個人・家族・村落といったヴァナキュラーな「戦争の記憶」を取り込むことが目指されるようになった。「戦争の記憶」は多様性をもっており、公式的な記憶とはずれた内容のものも存在しているが、ベトナム国内には、公式的な「戦争の記憶」に対抗し、否定するような「戦争の記憶」は公にはなっていない。有力な

「対抗記憶」が存在していない中、「戦争の記憶」は共産党の一党独裁体制を維持する「保守的」政治機能を果たしている面がある。

注 釈

- 1 「世界」一九九九年八月号。
- 2 このことについては、古田元夫「戦争の記憶と歴史研究」（小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、一九九八年）参照。
- 3 一九八七年頃より出身成分が問われなくなり、家譜などの文書が表に出てくるようになった。桜井由躬雄「ベトナムにおける新出史料の紹介——とくに村落地方文書について」一九九三年四月二四日、東南アジア史学会関東例会。
- 4 Thaveporn Vasavakul, "The Changing Models of Legitimation," Muthiah Alagappa ed., *Political Legitimacy in Southeast Asia*, Stanford University Press, California, 1995. pp. 257-289.
- 5 第二次世界大戦に関しては、八月革命と独立記念日に関連するもの以外は特にない。直接的ではないが、第二次大戦中に作られた人民軍の創設記念日はある。
- 6 Nguyen Hung quoc, *Van Hoc Viet Nam Duoi Che Do Cong San 1945 - 1990*, Van Nghe xuat ban, California, 1991. p. 208.
- 7 これに対して、かつて共産党の高級幹部で共産党機関紙『ニャンザン』の副編集長をつとめ、一九九〇年に亡命したブイ・ティン (Bui Tin) などは、ベトナム労働党（現・共産党）がベトナム戦争を主體的に仕掛けた、としている。
- 8 Bui Tin, *May Mu The Ky*, Da Nguyen, California, 1998. p. 204.
- 9 Ban Chi Dao Tong Kei Chien Tranh Truc Thuoc Bo Chinh Tri, *Tong Kei Cuoc Khang Chien Chong My, Cuu Nuoc Thang Loi Va Bai Hoc*, Nha Xuat Ban Chinh Tri Quoc Gia, Ha Noi, 1995.
- 10 Bo Giao Duc Va Dao Tao, *Lich su 12 : Tap Hai*, Nha Xuat Ban Giao Duc, 1995.
- 11 首都ハノイには軍事博物館（一九五九年創設）があり、主要都市には戦争記念博物館がだいたいある。一九九九年にはホーチミン・ルート博物館が開館。
- 12 戦争の記録については、国家レベルとしては、国防省の中に軍事史研究所があ

り、ここでは本格的な軍事史研究が行われている。ベトナム人民軍隊の中には、映像記録保管所があり、膨大なベトナム戦争の映像のフィルム、写真が保存されている。これらについては、次の二本のテレビ番組（いずれもNHK制作）を参照。「戦争を記録した男たち」（一九九五年）、「知られざる遺作…祖国の戦争を撮ったベトナム人たち」（一九九八年）。

- 12 例えば、一九九八年に演劇常務委員会と軍隊演劇団によって発動された「祖国防衛・革命戦争のテーマで戯曲を創作する運動」などがある。

- 13 一九九八年の国家による顕彰の状況。

金星勲章：二八人

ホーチミン勲章：二八人

「英雄的ベトナムの母」の称号：一一三九人

「人民武装勢力英雄」の称号：六六三の単位・個人

「労働英雄」の称号：二二二の単位・個人

「人民教育家」の称号：一五人

「優秀教育家」の称号：五一一人

独立勲章：四六八四人

労働勲章：一六一九人

抗戦勲章・徽章：二六六七四四人

軍功勲章：一三人

友好勲章・徽章：五六人

祖国安寧徽章：二二〇二人

決勝軍旗徽章：一八二人

（出所：Nhan Dan 5-3-1999）

- 14 佐藤未来子・金成蘭・今井昭夫編『共産党支配下のベトナムにおける「運動」の展開』東京外国語大学外国語学部東南アジア課程今井研究室、一九九九年。二八二～二八三頁。

- 15 ベトナムの文芸において戦争のテーマはいまだに大きなテーマの一つである。『軍隊文芸（Van Nghe Quan Doi）』では過去二年間、戦争と戦後の兵士をテーマとした短編小説が二〇〇へらい掲載されており、依然として戦争をテーマとした小説がかなり多く掲載されている。

- 16 邦訳では、ベトナム外文出版社編、松井博光訳『あの人の生きたように』新日本新書、一九九六年。

- 17 Vinh Xuong, 35 Nam Dau Tranh Vi Chu Nghia Xa Hoi Co Tinh Nguoi, Vi Dan Chu, Tu Do, Vi Chu Nghia Nhan Van, Den Dan Nguoi Viet, so 3, mua xuan, 1991.

- （今井昭夫訳「人間性をもった社会主義、自由・民主、人文主義のための三五年の闘争」『ベトナム近現代思想史資料翻訳（一）』東京外国語大学・海外事情研究所、一九九三年。六二頁。）

- 18 邦訳では、バン・ティエン・ズン著、世界政治資料編集部訳『サイゴン解放作戦秘録』新日本出版社、一九七六年。

- 19 Tran Van Tra, Nhung Chang Duong Cua B2 - Binh Dong, Nha Xuat Ban Van Nghe Thanh Pho Ho Chi Minh, TP. Ho Chi Minh, 1982.

- 20 古田元夫氏によれば、ベトナム戦争の勝因を、前者は党中央の正しい指導の結果だとしているのに対して、後者は地方や下部のイニシアティブの重要性を強調した。古田元夫「ベトナムにとつてのベトナム戦争」『東南アジア歴史と文化』二〇号、一九九一年。

- 21 Nguyen Minh Chau, Viet Ve Chien Tranh, Trang Giay Luoc den, Nha Xuat Ban Khoa Hoc Xa Hoi, Ha Noi, 1994, pp. 44-55.

- 22 Ton Phuong Lan, Chien Tranh qua Nhung Tac Pham Van Xui Duc Giai, Tap Chi Van Hoc, so 12, 1994, p. 15

- 23 Le Luu, Thoi Xa Vang, Nha Xuat Ban Tac Pham Moi, Ha Noi, 1987.

- 24 邦訳では、井川一久訳『戦争の悲しみ』めるくまー、一九九七年。大川均訳『愛は戦いの彼方へ』遊タイム出版、一九九九年。

- 25 Duong Thu Huong, Tieu Thuyet Vo De, van nghe, xuat ban, California, 1991.

- 26 例えば、Tran Duy Chau, Tu dau den Noi buon chien tranh? Tap chi cong san, so 10, 1994, pp. 54-55. Nguyen Trong Binh, Toi tiet cua ky uc mot dung y xau Quan Doi Nhan Dan, 25-11-1995. また『公安（Cong An）』紙の一九九五年九月二〇月の「文学演壇」の連載記事など。

- 27 Nguyen Mong Giac, Tha Huong, van nghe xuat ban, California, 1989.

- 28 Cao Xuan Huy, Thang Ba Gay Sung, Van Khoa, California, 1986.

- 29 Duong Thu Huong, "Tieng vo canh cua bay qua den," *Den Dan*, so 86 / 6, 1999, pp. 7-10. (今井昭夫訳「鴉の群の羽ばたきの音」東南アジア文学会編『東南アジア文学』一〇号、一九九九年七月。五六〜六六頁)
- 30 Nguyen Van Tran, *Viet Cho Me Va Quoc Hoi*, Van Nhe xuat ban, California, 1995, pp. 225-227.
- 31 Wayne Karlin, Le Minh Khue and Truong Vu, *The Other Side Of Heaven*, Curbstone Press, 1995.
- 32 「旧抗戦者クラブ」(Cau Lac Bo Nhung Ngnoi Khang Chien Cu)「は南部で一九八四年に結成されたが、「民主化運動」にかかわった為、その後解散させられている。現在、退役軍人の組織としては官製の「ベトナム退役軍人会(Hoi Cuu Chien Binh Viet Nam)」がある。名誉会長は、ヴォー・グエン・ザップ(Vo Nguyen Giap)。
- 33 共産党や第七军区司令部によって一九九七年から発動されている (*Nhan Dan* 19-10-1999)。
- 34 *Nhan Dan* 24-9-1993.
- 35 Chu Huy, "Le Hoi Lang Que Ngay Nay" *Vn Hoa dan gian*, so 1, 1993, p. 12.